

たかさし「史話 63

市内神社にみる神仏習合の姿

現在でも一部の寺院境内に 曾根天満宮は社内に「供僧くそう 鳥居など神道関係の建造物が あることを不思議に思われた 経験をお持ちの方もおられる と思います。しかし、神社か ら仏教色が、寺院から神道色 が払拭されたのは、明治維新 にもなういわゆる神仏分離 政策によってであり、それ以 前は仏教と神道が混在したい わゆる神仏習合こそが一般的 な姿でした。このことを示す 一例として、今回は『高砂市 史』史料編近世所収の史料か ら、市内の神社に見える神仏 習合の一面を紹介したいと思 います。

曾根天満宮は社内に「供僧くそう 所」という施設を持ち、天台 宗や真言宗の僧侶を雇い入れ ていました。神社が氏子の奉 仕による月待日待仁王経や大 般若経の転読など仏教儀礼を 行っていたためです。これは 曾根天満宮が、近世に入って も天台宗の門跡寺院（天皇や 撰闋家の子息などが住持につ く寺格を持った寺院）である 曼殊院を執奏家（社家の官位 などを朝廷に取り次ぐ存在） に仰いでいたことも関係する と考えられます。

もともと、神祇伯家白川家 とならば近世神道の本所で、 唯一神道を主張した吉田家配 下に近世初期から属した高砂 神社などはこうした仏教色が 比較的弱かったようです。が、 それでも鳥居のすぐ近くに宮 寺であったと考えられる海宝

寺が存在し、さらに神職家は 寺檀制度上で近世を通じて浄 土宗十輪寺の檀家でした。こ のように、近世においても、 仏教と神道は法制度面から日 常生活の側面まで非常に近し い存在だったのです。

（市史編さん特別執筆者

澤 博勝）

曾根天満宮文書

「曾根神社供僧雇入之記」



荒井神社には幕末まで浄土 宗の神宮寺という社僧が存在 しましたが、市内で唯一朱印 地を持った曾根天満宮（曾祢 村天神社）はより仏教色が濃 い神社でした。

寺であったと考えられる海宝